

古代宮都と郡山遺跡・多賀城

古代宮都からみた地方官衙論序説

Ancient Imperial Capital and Koriyama Site/Tagajo :
Introduction to the Theory of Local Government Offices
seen from the Ancient Imperial Capital

林部 均

HAYASHIBE Hitoshi

はじめに

①郡山遺跡と多賀城

②飛鳥宮と藤原宮

③古代宮都の視点からみた郡山遺跡と多賀城

まとめ

【論文要旨】

郡山遺跡は宮城県仙台市に位置する飛鳥時代中ごろから奈良時代前半の地方官衙遺跡である。多賀城は宮城県多賀城市に所在する奈良時代から平安時代にかけての地方官衙遺跡である。郡山遺跡は仙台平野の中央、多賀城は仙台平野の北端に位置している。ともにヤマト王権、もしくは律令国家の支配に従わない蝦夷の領域に接する、いわば国家の最前線に置かれた地方官衙であった。

本論では、このような地方官衙の成立・変遷に、古代宮都（王宮・王都）がいかなるかわりをもったのかを、発掘調査で検出される遺構の比較をもとに具体的に検討を加えた。そして、古代宮都からの影響という視点をもとに、国家がいかにこの地域にかかわりを持ち、そして支配したのかを読み取ろうと考えた。古代宮都からみた地方官衙研究の試みである。

郡山遺跡・多賀城は、7世紀中ごろ以降の郡山遺跡Ⅰ期官衙、7世紀末から8世紀前半のⅡ期官衙、そして、奈良時代前半以降の多賀城と変遷する。郡山遺跡Ⅰ期官衙は城柵であり、郡山遺跡Ⅱ期官衙と多賀城は陸奥国府であった。これらの遺跡を、①造営方位、②外郭の形態とその変化、③空閑地と外濠、④官衙中枢という視点から分析し、飛鳥宮、藤原宮・京、平城宮といった古代宮都と比較検討した。

そして、造営方位や外郭のかたち、官衙周辺の空閑地と外濠という点において、郡山遺跡Ⅱ期官衙に古代宮都、とくに藤原宮の影響が強く表れていることを確認した。さらに、郡山遺跡Ⅱ期官衙と多賀城とは同じ陸奥国府であるにもかかわらず、継承される点が少ないことを指摘した。また、多賀城には確かに平城宮の影響がみてとれるが、郡山遺跡Ⅱ期官衙にみられたような宮都からの強い影響はなく、むしろ、影響は小さくなっていると考えた。

そして、郡山遺跡Ⅱ期官衙に古代宮都の影響が強まるのは、この時期に律令国家が、この地域の支配をいかに重要視していたかを示し、また、郡山遺跡Ⅱ期官衙から多賀城に継承される点が少ないのは、その背景に律令国家の地域支配の大きな転換があると考えた。

このように地方官衙を古代宮都からみた視点で捉えなおすことは、有効な手法であり、他の地域においても、同様の視点で分析すれば、律令国家の地域支配をより具体的に明らかにすることができるのではないかと考えた。

【キーワード】 古代宮都、郡山遺跡、多賀城、城柵、地方官衙論